

HPV ワクチン(子宮頸がん予防ワクチン)、
受けたほうがいいの？

Doctor 和歌山県立医科大学産科婦人科学 井篁一彦

子宮頸がんは、20～30歳代の女性で増加しており、年間約1万人がかかり、約3000人が死亡しています。治った場合でも、子宮の摘出が必要だったり、治療の影響で妊娠や出産が難しくなることもあります。

◎ HPV ワクチンを接種するメリットは？

子宮頸がんの原因は、性的接触によって感染するヒトパピローマウイルス (HPV) です。健康な女性では、HPVに感染してもほとんどの場合は自然に消失しますが、一部の人は感染が持続して「前がん病変」となり、がんへと進みます。そのため、初めての性交渉を経験する前の10歳代前半でワクチンを受けてウイルスの感染を防げば、子宮頸がんを防ぐことができます。現在国内で承認されているワクチンは3種類あり、子宮頸がん全体の60～70%の原因となる2つのタイプ(16型・18型)のHPVを中心に感染を防ぎますが、20～30歳代の子宮頸がんでは特にこの2つのタイプが原因となっていることが多いです。子宮がん検診だけではがんが見逃されることがあり、また若い女性のがん検診の受診率が低いことから、ワクチンの有効性・安全性が世界中で認識され、多くの国で接種プログラムが実施されています。ワクチン接種によりHPV感染率の低下や前がん病変の減少、そして若年女性の浸潤がん(子宮頸がん)の減少などの有効性が国内外で示され、日本産科婦人科学会はワクチン接種を推奨しています。国内では2013年4月より定期接種ワクチンに指定されています。

(最新情報は必ず下記URLから確認してください)

◎ ワクチンの有効性とリスクの両方を理解して、受けましょう

ワクチン接種によってがんの予防ができることは、女性の健康にとって大切なことですが、一方どんなワクチンでも、接種後に何らかの症状がおこるリスクはあります。HPVワクチン接種後、注射部位の痛みや腫れがでることがありますが、ほとんどは自然に治ります。痛みへの不安によって、接種後に気分が悪くなったりふらつきたりすることもあるので、少し休んでから帰宅するといいいでしょう。非常にまれですが、接種後に長く続く痛みやしびれ、手足の動かしにくさなどの症状が国内で5万接種に1回程度の頻度で報告されましたが、厚生労働省は、これらの症状はワクチンが原因ではないとの見解を発表しています。しかし因果関係の有無にかかわらず、ワクチン接種後に困った症状がでた場合は、すぐに相談できる窓口や医療機関が整備されています。HPVワクチンが子宮頸がんを防ぐという効果と接種後におこるかもしれない症状について医師から説明をきき、十分に納得した上で希望者が安心して接種を受けることが大切です。

※2022年度より定期接種の積極的勧奨差し控えが中止となり、接種勧奨が再開されています。詳細は、日本産科婦人科学会ホームページ(一般の皆様へ)内「子宮頸がん HPV ワクチンに関する正しい理解のために」や厚生労働省ホームページ内「HPV ワクチンに関する情報提供資料」を参照してください。

子宮頸がん HPV ワクチンに関する正しい理解のために http://www.jsog.or.jp/modules/jsogpolicy/index.php?content_id=4

HPV ワクチンに関する情報提供資料 <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou19/leaflet.html>